

日本旧石器学会

ニュースレター 第13号

NEWS LETTER No.13

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

栃木県高原山黒曜石原産地遺跡群の調査

国武貞克（奈良文化財研究所）

1. はじめに

高原山黒曜石原産地遺跡群（写真1）は2005年7月に田村隆（千葉県立中央博物館）と国武貞克（当時日本学術振興会特別研究員）らの踏査により発見され、8月に栃木県教育委員会を通じて地元の矢板市教育委員会に報告された。2006年から国庫補助を受けて、矢板市教育委員会（担当：石川均）を事業主体とし、高原山黒曜石原産地遺跡群剣ヶ峯地区遺跡調査指導委員会・同調査委員会が組織されて、文化庁および栃木県教育委員会の指導を受けながら、5ヶ年計画の発掘調査事業が行われている。本年は4ヶ年目の調査が終了し、本調査事業の主な成果も概ね目処がつきつつあるところである。小稿では、調査委員会了承のもと、2008年までの成果に基づき、考古調査を中心とした成果を紹介する。

調査は、地質調査と考古調査を担当する2つの部会が分担しており、その両方を小野昭首都大学東京名誉教授が、調査指導委員会委員長として統括している。考古調査は、調査指導委員の海老原郁夫（栃木県考古学会副会長）と鈴木斌（矢板市文化財保護審議委員）の指導を受けつつ、調査現場においては小野昭調査指導委員会委員長と考古部会の調査委員の田村隆、上野修一（栃木県立博物館）、森嶋秀一（前同）、国武貞克（奈良文化財研究所）、および芹澤清八（とちぎ生涯学習文化財団）が指導にあたり、矢板市教育委員会によって調査が進められている。

発掘調査にあたっては、主に大学院生、大学生を調査員として、千葉県および栃木県在住のボランティアが参加している。2008年までに調査員は東京大学、首都大学東京、帝京大学、慶応義塾大学、千葉大学、城西大学、明治大学、國學院大学、早稲田大学、宇都宮大学からのべ54名が派遣されている。

調査地へは片道1時間40分以上の登山が必要で、一日の実働時間は3時間程度しかない（写真2）。峻険な山岳地形をよじ登るうえに、主稜線を吹き抜ける晩秋の突



写真1 遺跡遠景



写真2 調査地へ登山

風や耐え難い冷え込み、および夏の雷雨と蜂虻による執拗な攻撃に晒されながらの発掘調査であるため、調査にあたる者の疲労は甚だしく、著しく効率の悪い調査である。毎日出土する膨大な量の石器も手分けして人力で担ぎ下ろすしか方法がなく、これも調査員の疲労に追い打ちをかけている。しかしながら白石哲夫氏（矢板市泉公民館）とご家族のご厚意で、高原山南麓の立派な古民家を宿舎として使用させていただき、その疲労を補って余りある栄養補給を頂いている。また急峻な山岳

地形の中での調査のため安全確保や登山道の整備の面で、地元の矢板岳友会（会長小林充）の貴重なサポートも頂いている。このように、本遺跡の調査では、多くの大学と行政組織の協力を頂いて、調査戦力がそれぞれの組織の枠を超えて集結するとともに、地元や遠方の様々な方々のサポートにより支えられており、個性的な調査体制をとっている。厳しい自然環境に制約された困難の多い調査であるが、関連組織による協力と調査参加者の努力により、一丸となって様々な困難を克服し、調査を遂行しているところである。

2. 黒曜石の分布

現在高原山では黒曜石は2カ所に分かれて分布していることが確認されている。ひとつは、剣ヶ峰から大入道に至る主稜線のうち標高1440mのピークを中心にした範囲であり、もうひとつは北麓の甘湯沢流域である。このうち遺跡が立地しているのは前者の剣ヶ峰から大入道に至る主稜線上の一部の尾根である。この範囲をとくに剣ヶ峰地区遺跡と呼んでいる。この尾根は黒曜石を含む流紋岩によって構成されていることが分かっている。黒曜石は流紋岩溶岩が噴出後に表面が急冷して形成され、溶岩岩体から剥落し堆積したとされている。そのため現在この尾根では黒曜石は、溶岩岩体から崩落した大型礫の形状で山腹に散布している（写真3）。さらに、溶岩噴出に伴ってその周辺に白色の火砕物が堆積しており、その中にも黒曜石原石が破片の形状で含まれている。この尾根は、ともに黒曜石を含む流紋岩質溶岩と白色堆積物によって構成されており、結果としてこの尾根を開析する桜沢右股支谷の六ノ沢、七ノ沢、八ノ沢の河床に黒曜石の大型の原石が散布している。そしてこれらの支谷から桜沢右股に黒曜石原石が供給されている。原石の大きさは最も大きな礫で長軸4mを超えるものもあるが、1mを超える角礫の頻度は高くなく、人頭大の角礫が多数散布している。石器製作に十分な大きさと石質の原石が、角礫状の岩塊で豊富に散布しているのが特徴である。毎年行っている分布調査の結果、現在までに確認されている旧石器時代の原産地遺跡は、この剣ヶ峰から大入道に至る主稜線上に集中していることが分かっている。黒曜石を含む溶岩の噴出地点にもっとも近い地点に形成されたといえる。

現在までの地質調査によって、この主稜線の標高1440m付近の尾根から黒曜石を含む溶岩や火砕物が噴出した後に、泥流が発生して北麓に流出



写真3 黒曜石巨礫

し当時の古塩原湖に流れ込み、結果として現在は北麓の甘湯沢流域の砂礫層中にも黒曜石が産出するというメカニズムが明らかにされた。このため、噴出地直近の剣ヶ峯地区遺跡と甘湯沢の黒曜石の成分は一致はするのだが、甘湯沢も含めて泥流堆積物中の黒曜石原石は大型のものは石器製作に耐えられない粗悪の石質のものが多く、良質のものは指の先ほどの小型のものに限られる。そのため分析者は産地分析で「甘湯沢」と表記すると、このような地質上の経緯を理解していない依頼者に対して、当時の原石採取地について誤った情報を与えてしまう恐れもある。当時の原石採取地点が判明した現在、今後の産地分析の高原山の比較試料としては、噴出地にもっとも近く大規模な原産地遺跡が形成されている剣ヶ峯地区の原石を用いるほうが良い。

3. 発掘調査の成果

遺跡の中心とみられる3つの沢の源頭部の調査概要を紹介する。

まず主稜線直下に位置する八ノ沢枝沢Bの源頭部付近の石器包含層の露頭では、土層断面の観察と断面図の作成、および石器の抜き取りが行われた。それによると、地表から基盤（IX層）に至る間に8枚の土層が確認され、これらは黒～茶褐色土の上層（I～IV層）と砂を多く含む下層（V～VIII層）に2分され、上層下層ともに枝沢Bに直交する方向に埋没ガリーが認められた。上層には石器は少なかったが、下層ではVI層より縦長剥片製で弧状のブランディングが施されたナイフ形石器が抜き取られた。基盤直上のVIII層からは端部整形石器を主とする台形様石器8点を含む多数の剥片、碎片が検出された（写真4右下3点）。この成果により、高原山黒曜石の集約的な採取と消費が後期旧石器時代初頭にまで遡る可能性が予測されることになった。高原山産黒曜石の利用は北関東では鹿沼軽石層直上から、房総半島では立川ロームX層より認められているため整合的である。

次に主稜線上に位置する八ノ沢枝沢A源頭部の調査概要を紹介する。剣ヶ峰から大入道に至る主稜線は1440mの小入道と呼ばれる小ピークを50m程度下った1390m付近で平坦な面が現れる。この平坦面は八ノ沢枝沢Aの源頭部を北から見下ろす位置にある。2007年から2008年にかけて東西1m、南北4mのトレンチで調査したところ、白色砂礫を主体とする土層とローム層を主体とする土層が交互に堆積しており、当初は土坑などの人為的な遺構として黒曜石の採掘坑の可能性を考慮したが調査の進展に伴い、現在では小規模な地滑りによる斜面崩落堆積と解釈している。この互層からは多量の石器が出土しており、周辺の石器包含層が侵食されて再堆積によるものと考えられている。この互層堆積が検出されたトレンチに対して直交して東西方向に設定されたトレンチでは、安定した堆積のローム層から両面加工の大型の石槍の製作址が検出された。石槍は大部分が未製品で、サイズは長さ10～20cmに対して、幅が5～7cmのものが多く、幅広の形態である（写真4）。この包含層は火山灰分析から縄文時代草創期に堆積したことが判明し、この時期の黒曜石原産地における大型石槍製作址としては貴重な例として評価される。この平坦面では2008年までに8㎡発掘され合計56674点出土しており、その密度の高さから石槍製作が集約的に行われた地点と考えられる。

最後に七ノ沢源頭部における調査概要を紹介する。この地点は2008年の分布調査で発見されたのだが、源頭部の北に接する尾根の斜面部に夥し

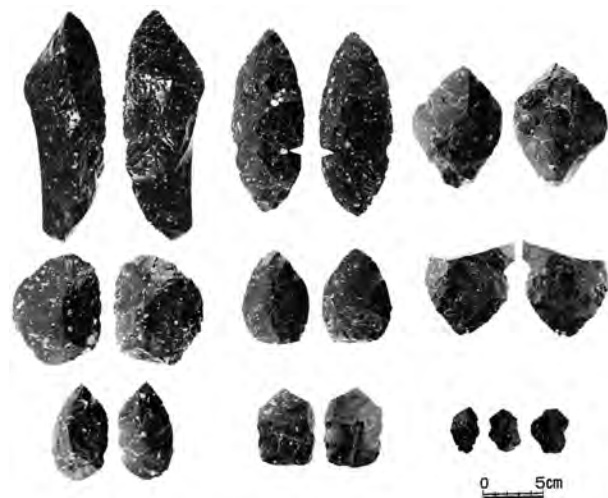


写真4 石槍と台形様石器

い量の遺物散布が確認されたため試掘調査を行ったものである。南北4 m、東西1 mのトレンチを地表から3.2 m掘削したところ、八ノ沢枝沢A源頭と同様に、白色砂礫を主体とする土層とローム層を主体とする土層の互層堆積が観察され、合計7538点出土した。八ノ沢枝沢A源頭と同様にこの互層堆積自体は、現在のところ小規模な地滑りによる斜面崩落土の堆積と解釈している。この地点で特筆すべきは、互層堆積の中間部に比較的水平的なローム層の堆積が認められたことである。このローム層に包含される有色スコリアが岩相からみて男体山起源の更新世のスコリアの可能性が指摘されている。そのためそれより下層の堆積がそれ以前に遡る可能性があり注目される。これに関連して縦長剥片素材の基部加工石器が出土していることから、後期旧石器時代のいずれかの時期の石器包含層の可能性を示唆している。

4. 今後の課題

遺跡の正確な範囲の確定が目前の課題であり、その中に先に3カ所の中心部として挙げた八ノ沢枝沢A,Bと七ノ沢の源頭部のような大規模な石器包含層を持つ地区が、ほかにどの程度分布しているのか、把握されなくてはならない。これまでのところ大規模な石器包含層は黒曜石を含む溶岩の露頭付近に形成されたことが分かっている。そのため山中をできる限り踏査して試掘し、当時の岩体露出地点を探り当てる調査が必要である。他に、八ノ沢枝沢B源頭で確認された台形様石器の包含層は、火山灰調査による検証が不可欠である。また縄文時代草創期とみられる石器包含層の広がりはまだつかめていない。同じく七ノ沢源頭部における3 m以上の石器包含層の性格についてもまだ把握されていない。中位に更新世のローム層が堆積することから下半部が更新世の所産である可能性が示唆されているが、時期について出土石器と火山灰分析から更なる検証が必要である。今後最も重要になるのが、各地点の地形形成と石器包含層の形成について地考古学的な視点からの検証である。これまで調査事例の極めて少ない高地の峻険な山岳地形に立地した原産地遺跡なので、地考古学的な視点なくしては、正しい理解ができないだろう。

さて、特殊な立地の遺跡のため保護や公開、活用をどのように進めていくのかについては、今後の大きな課題となっている。まず保護については、主稜線の北斜面に露出する包含層が冬の季節風をまともに受けて浸食が進行し、毎年多量の石器が流出している。国立公園第2種特別地域にあたるため岩石採取は禁じられているが、黒曜石原石と石器の無断採取が問題となっている。人目の届きにくい山岳地帯にあるため自然と人為による遺跡破壊を防ぐ具体策が早急に必要とされている。

公開については、2009年10月18日には初めて現地説明会が開催され、約100名の参加者が遺跡まで山登りをした(写真5)。その翌日には矢板市文化会館において、「高原山産黒曜石の開発と利用」というタイトルの報告・討論会が、矢板市教育委員会と石器文化研究会の合同で開催された。会場には関東全県と長野県から高原山産黒曜石製旧石器資料が多数持ち寄られ、原産地遺跡の出土資料とともに一堂に並べて展示された。



写真5 現地説明会の開催

独創的な企画であり貴重な資料見学会となったが、地元の方々にも2万年ぶりの里帰りとしてとても喜ばれた。

遺跡の活用については、調査成果を受けてこれから具体的に検討される予定である。調査成果を地元に還元するために、黒曜石と旧石器の魅力を分かりやすく伝えて、高原山黒曜石原産地遺跡群の活用を支え、さらに調査拠点となるような施設なども期待される。

“2 万年前の住居状遺構を復元！”
史跡田名向原遺跡とガイダンス施設
「旧石器ハテナ館」の紹介

1. 史跡の概要

史跡田名向原遺跡は、区画整理事業に伴う発掘調査によって平成9年3月に発見され、国内最古の住居状遺構として脚光を浴びた。

発見された約2万年前（発見当時は15,000年前と発表）の後期旧石器時代の住居状遺構は、直径約10mの範囲から槍先形尖頭器193点を含む約3,000点もの石器、外周を環状にめぐる270点もの円礫、2ヶ所の炉跡、12ヶ所の柱穴跡が確認され、国内でも珍しい良好な状態で建物跡と認定できる遺構である。

住居状遺構は、学術的価値が高く、かつ希少な遺構であるため、市民や研究者から現状保存と活用が求められた。その結果、事業者の協力を得て、区画整理事業や道路計画が変更され、遺構の保存が決定した。そして、平成11年1月28日に旧石器時代の歴史を物語る重要な遺跡として、国指定史跡となった。

2. 整備概要と活用事業

相模原市では、遺構の保存と活用を図るため、「史跡田名向原遺跡公園」として整備することを決定した。その後、学識経験者や教育関係者、市民の意見を踏まえながら整備を進め、平成19年3月31日に住居状

遺構を復元・公開した「史跡田名向原遺跡公園」を開園した。その他、公園内には周辺の発掘成果に基づき縄文時代の竪穴住居、古墳時代の谷原12号墳が復元・公開され、3つの時代が学べる展示となっている。

また、遺跡への理解をさらに深めてもらうためガイダンス施設の整備を進め、平成21年4月に「史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館」（愛称「旧石器ハテナ館」）が、全国的にも数少ない旧石器時代をテーマとした施設として開館した。展示内容は、発見された住居状遺構を中心に、旧石器時代について模型、映像、パネル等で解説するとともに、遺構から発見された石器の実物も見ることができる。その他、周辺から発掘された縄文、古墳、奈良・平安時代の出土品も展示している。

旧石器ハテナ館では、学習・指導員やボランティアガイドによる展示室での案内・解説のほか、実習・講習室において講演会、連続講座、石器作りなどの各種体験教室等を開催し、来館者等への学習支援を積極的に行っている。旧石器時代は未だに謎の多い時代であるが、旧石器ハテナ館を拠点とした田名向原遺跡の公開・活用により、その謎（＝ハテナ）を少しでも解明する手がかりになればと考えている。

（連絡先）史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館（旧石器ハテナ館）

〒229-1125 神奈川県相模原市田名塩田3-23-11 (Tel) 042-777-6371

（相模原市教育委員会文化財保護課）



写真1 住居状遺構の発掘



写真2 田名向原遺跡公園



写真3 展示室「旧石器時代の暮らし」



写真4 石器作り

第2回アジア旧石器協会北京大会への参加

第2回アジア旧石器協会が北京原人第一頭骨発見80周年国際古人類学術検討会・第一次アジア第四紀研究学術大会の一つのセッションとして、平成21年10月19日から平成21年10月23日に中国北京市の西苑ホテルにて開催された。日本からは日本旧石器学会を代表して、アジア旧石器協会執行委員であり日本旧石器学会渉外委員長でもある小畑弘己氏、日本旧石器学会副会長比田井民子、総務委員長島田和高氏が中国社会科学院古脊椎動物与古人類研究所からの招待を受け参加したほか、旧石器時代の研究者をはじめ、地質学、人類学の分野の13名前後の日本の研究者が参加した。本学会からは阿子島香、出穂雅己、海部陽介、佐藤宏之、清水宗昭、松藤和人、吉川耕太郎の諸氏が参加した。今回は考古学のみならず人類学、第四紀と広い範囲を対象とする学会ということもあり、国外からの参加者はアジア、欧米、アフリカなどの24カ国にもものぼり、国内からの参加者も含め総勢約250人となり、さながら研究オリンピックのような雰囲気の中で進められた。

内容は開会のセレモニーを含む4日間にわたる講演、研究発表と最終日は周口店へのショートエクスカーションで構成された。続く10月24日からのエクスカーションは河北省泥河湾方面と広西省南寧方面への2コースが用意された。



写真1 アジア旧石器協会役員会

研究発表のセッションは以下のとおりである。このうちアジア旧石器協会のセッションは Topic2 に組み込まれた。

Topic1 Origin and Evolution of humans 「人類の起源と進化」

Topic2 Human Behaviors and Cultures 「人類の行動と文化」

Topic3 Changes in geological environment and human activities in Asia 「アジアにおける地質環境の変化と人類の活動」

特にこの度は北京原人発見80周年とういこともあり、中国社会科学院古脊椎動物与古人類研究所をあげての国家的な行事であり、本会場である西苑ホテルと周口店遺跡におけるいくつかの盛大な式典が催された。また、周口店のショートエクスカーションでは人民政府も関与しているためか、警察の警備のもとに見学やセレモニーが進められた。

また、周口店エクスカーション後の北京市郊外の会場での閉会セレモニーでは、「ペキンマンの文化、芸術の上演」と題する華やかなショーが披露された。北京原人が生まれ進化し、現代中国の礎になったという内容の歌や踊りが1時間あまり続くディナーショーに私達参加者は圧倒された。

参加したセッションでは中国各地の前期旧石器時代から後期旧石器時代の地域研究、年代などを中心とし研究発表を主として、これに日本、韓国、ロシアの研究発表が加わった。特に目立ったのはハンドアックスを代表とする前・中期旧石器時代の資料が中国、韓国などで増加しており、これに対応するような比較資料がない日本は、なかなか同じ土俵に立って議論をすることが難しいことを改めて感じさせられた。

研究発表では「人類の行為と文化」のセッションにおいて、小畑弘己氏がフランスのエリック・ボエダ氏と共に司会を務め、島田和高氏が「4万年を遡る遺跡の存否について」を発表し、比田井は現在、日本旧石器学会データベース委員会を中心に進められている遺跡データベースへの取り組



写真2 田園洞近景

みを中心に「日本列島における旧石器時代遺跡のデータベースプロジェクト」を発表した。

発表要旨作成、口頭発表は英語または中国語によるものと定められており、発表要旨は英語、中国語で作成され中国語のものは英語の翻訳をつけている。しかし、研究発表は中国の研究者によっては、パワーポイント資料のみ英語で作成し、口頭発表は中国語によるものなどもありあった。この点は今後の日本開催時においてもあまり国際学会の形式にとらわれず従来の研究発表、シンポジウムに参加するのと同じように、多くの会員が参加、研究発表ができるようにする参考になる。

以上のような雑駁な報告ではあるが、2年後の日本における開催では、日本旧石器学会はアジアに向けて、学史的にも緻密に積み重ねられた日本独自の研究を十分に紹介し、ユーラシア大陸の東端地域として関連地域の様相との関係をアピールし、極東アジアのなかでの日本を位置づけるという重要な責務があると考えている。

文末ではありますが、私達を受け入れていただいた中国社会科学院古脊椎動物与古人類研究所ならびに日本旧石器学会との連絡の労をとっていた

だいた高星副所長には改めて御礼申し上げます。

(日本旧石器学会副会長 比田井民子)

アジア旧石器協会役員会報告

2009年10月22日、北京市西苑ホテルにおいて、アジア旧石器協会役員会が開催されたので、以下により報告する。

参加者

(ロシア) ジェレヴァンコ会長、ズロズドフ副会長、シュンコフ執行委員

(中国) 高星副委員長、王幼平執行委員、他1名

(韓国) 李隆助副会長、韓昌均執行委員、李憲宗

(日本) 小畑執行委員、比田井日本旧石器学会副会長、島田日本旧石器学会総務委員

計12名

議題

1. 2010年第3回大会

10月に大韓民国忠清南道公州の石壮里博物館で開催

タイトル「The 3ed Asian Paleolithic Association International Symposium Convergence of the Asian Paleolithic Culture: Similarity, Difference, Integration」

主催：韓国旧石器学会

2. APAの役員選挙について

来年6月に現役員の任期が切れるが、全員が集まって選挙をやるのは困難であるので、第3回のAPA会議前日に、現役員、新役員が公州に集まり、その際、選挙を実施する。

APA大会の開会式において、新旧会長、役員交代・承認を受ける。

3. APAのロゴについて

APAのロゴをロシア側が案を作成し、これを各国で検討して、ロゴとする。

原案としては、男女の原人？像を丸いマーク中に入れるという案が提出された。製作期限は示されなかった。

4. APA 役員の認定証

会長名で役員の認定証を発行してほしいと李隆助副会長から提案があり、原案を李憲宗が製作することで承認された。製作期限は示されなかった。

5. 執行委員の任期中の変更について

各国の事情により、任期途中の副会長および執行委員の人事変更については、各国で承認され、会長の承認を得れば、可能である旨、確認された。

(日本旧石器学会渉外委員長 小畑弘己)

おしらせ

データベース印刷本『日本列島の旧石器時代遺跡』 頒布代金振り込みのお願い

データベースを公開するための『日本列島の旧石器時代遺跡—日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡のデータベース—』の出版については、すでに基本的なデータ集を完了し、現在分布図や解説部分の編集を進めているところで、2010年春には刊行の運びとなる見込みです。

この刊行物については、これまで葉書・Fax等による頒布の予約をお願いしてきましたが、このたび日本旧石器学会役員会で最終的な頒価が決定されましたので、今後は代金振り込みをもって予約とします。これまでに予約をしていただいた皆様には厚く御礼申し上げますとともに、下記による振り込みをお願い致します。まだ予約されていない皆様には、この機会に『ニュースレター』第12号で内容をご確認のうえ、振り込みをお願いします。また、会員諸氏のまわりで関心のある方がおいでしたらお薦め下さい。

なお、本の発送は印刷所から直接行います。やむを得ない事情がある場合を除き、その後における学会の直接頒布等ではできるだけ避ける方向で進めたいので、確実な入手を希望される方はもちろん、多くの皆様に下記期限までの代金振り込みをお願い致します。(なお、次の方は1冊が無料献呈となります：①DB作成都道府県責任者、②DB作成地域分担者で1件以上のデー

タ入力者、③新旧データベース委員会委員)

本の体裁等：A4版、約400頁、遺跡・文化層データ数約16,000件、CDデータ付き

頒 価：1冊6500円（国内送料は日本旧石器学会負担）割引頒価：1冊5500円（国内送料は日本旧石器学会負担）【対象は①日本旧石器学会会員、②DB作成都道府県責任者・地域分担者・データ入力者のいずれかの方】

振込先：郵便振替口座番号00180-8-408055

加入者名 日本旧石器学会

※通信欄に書名『日本列島の旧石器時代遺跡』と冊数を明記し、割引頒価で送金の場合は上記①②の該当資格を記す。本は振り込み依頼人宛で発送しますので、郵便番号・住所・氏名を楷書で記入願います（可能な限り電話番号も）。

振込期限：2010年3月25日

(日本旧石器学会データベース委員会)

学会ホームページ開設のお知らせ

当学会の公式ホームページを開設しました。学会活動や旧石器関連情報などをお知らせしていく予定です。ホームページのURLは<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpra/index.htm>です。会員の皆様のご意見を反映して、より良いホームページにしたいと思います。ご意見等ございましたら、学会事務局までお寄せください。

(広報委員長 西井幸雄)

日本旧石器学会ニュースレター 第13号

2010年1月31日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

加藤勝仁・谷和隆・藤野次史・山原敏朗

発行：日本旧石器学会

事務局：明治大学博物館 島田和高

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

アカデミーコモン地階 電話：03-3296-4431

E-mail ma96018@mics.meiji.ac.jp